

ひとつのいのち

その気付きのための理性(7)

—人格的一神教の系譜と回心—

川崎医療短大 医用電子工学科 川崎医科大学名誉教授

中 川 定 明

(平成8年10月7日受理)

A common life of all the living things

—reason for the enlightenment of itself— (6).

Sadaaki NAKAGAWA

Professor Emeritus, Kawasaki Medical School

Kurashiki, 701-01, Japan

(Received on October 7, 1996)

概 要

今回から「いのち」のひとつの活動である「宗教の領域」に入る。まず旧約聖書のユダヤ教から新約聖書のキリスト教への移行を古代の歴史から探り、つぎに『死海文書』について略記して、それがイエスの記録として新約聖書に書いてあるよりも正しいことを述べる。つづいて、7世紀頃におけるキリスト教とイスラム教の関係をさぐる。イスラム教は、ユダヤ教に由来する唯一の神を奉じることをマホメットが啓示「コーラン」によって示し、やがてユダヤ教徒・キリスト教徒から独立してイスラム教を立てて破邪顕正の「聖戦」を開始した歴史がある。最後に人格的一神教であるキリスト教の教徒における回心と「宗教的経験」の諸相を記す。

Abstract

As we consider "life", we must consider the field of religion. Judaism is the religion of the Old Testament, which prophesied the appearance of the New Testament, which was probably, written during the 100 years after the death of Jesus. The so-called "Dead Sea Scrolls" disclosed more about the actual life of Jesus Christ. The relationship of Judaism, Christianity and Islam is considered to be as follows. Their "God" is the same "God" known as Jahave in Judaism, Jehovah in Christianity and Allah in Islam, as seen in Koran. In the 7th century, Mahomet established Islam, after the revelation of Allah. And a holy war followed in the centuries. In the last section, we want to discuss an enlightenment of God in Christianity that is not found through psychology, philosophy or theology, but is the most characteristic and rare phenomenon of humankind.

I. オリент世界 (中近東) の古代

古代のエジプト、イスラエル・ユダヤとメソポタミアを含むオリент世界は、約二万年前

から乾燥に見舞われて低木草原地帯になった。エジプトとメソポタミアは、それぞれナイル川とチグリス・ユーフラテス川に恵まれて、灌漑農耕文明と王朝が発達した(川村¹⁾)。原始時代のエジプト王は良き神の化身とされて「神王・ファラオ」といわれたが、いつの頃からか絶大な権力をにぎった王に支配される中央集権国家になった。戦争捕虜や拉致された外国人からなる、作業別にわけられた奴隷の数は約十万人もいた。一万年前に、すでに王の墓であるピラミッドが作られたが、その高度な技術の基礎になった文明とともに、巨石を積み上げる莫大な人力は奴隷によって担われた(中山²⁾)。一方、チグリス・ユーフラテス川の流域にはアッシリア帝国やバビロニア王国などができた。それらの王達もまた「神王」であった。地理的にエジプトとメソポタミアを繋ぐ回廊にあたるイスラエル・ユダヤの住人は、荒れ地のカナーン地方に住んで遊牧民となり、エジプト、メソポタミアの灌漑農耕文化と奴隷文化に象徴される神王思想を批判しながら、砂漠の神ヤハウェ Jahave (エホバ Jehova) を信じていた³⁾。イスラエルは「神の支配する国」の意味で、ユダヤは民族の名である。イスラエル・ユダヤは砂漠の宗教共同体であった。紀元前1,000年頃に賢王ダビデに率いられる王国がつけられ、ソロモンが継ぎ、そこには古代オリエントの特長である“王は神である”という思想はなかった⁴⁾。その王国は紀元前587年に滅んだ。創世記には、わが子をヤハウェ神に捧げようとしたアブラハムに対して神が、“わたしは誓う。汝の子孫を天の星・浜辺の砂のように数多く増し加えることを”という誓約があったと記されている。創世記50章『ヨセフ、エジプトへ来る』には、父親に偏愛された末弟ヨセフが兄弟に憎まれて隊商に銀二十枚で売られ、隊商からエジプト王の大臣に転売されたとある。賢いヨセフは後に大臣の重臣になった。カナーン地方が飢饉に襲われたとき、命をつなぐためにユダヤ教徒がやむなくエジプトに移住し、公的奴隷集団になったと推定される。しかし、彼らは奴隷の苦しみから逃れるために、指導者モーゼに導かれてエジプトから脱出した。そのときモーゼがヤハウェに祈ると、紅海に一筋の通路ができてエジプト軍の追跡をまぬがれたという「紅海渡りの奇跡」があって、再びカナーンの地に帰った記録がある。近年の学者達は、砂漠の現象として、砂丘が一夜で猛烈な砂嵐で無くなったり、大きい川があると思っただけの次の日には無くなっているような事があり、モーゼ達に生をもたらしたのはそういう現象だったという見方が有力である⁵⁾。ともかく、こうしてイスラエルの民にとって奇跡を現したヤハウェのめぐみが、一層その信仰を固めさせた⁶⁾が、これがイスラエルの先祖であり、このとき「モーゼの十戒」が定められた。その第一戒に、ヤハウェ以外の何者も神としてはならないと定められている。私ども日本人にとって、神と人との契約という言葉は奇妙にきこえるが、“宗主である者がその支配下の者との間に契約関係を結ぶ”という思想は、絶対主権・専制主権としてのファラオではないという意味を持ったのであろう。この契約思想がユダヤ教とキリスト教の特色で、その底に流れるものは「神の愛」である⁷⁾。新約聖書のヨハネ福音書は、ヨハネの弟子であったイエスが、「神の国」の到来を予告する運動を記したものであった。また、救世主・メシアであるイエスの伝道を記した多くの福音書は、当時の「終末意識」の果てに神の愛を信じ、神との交わりと隣人との交わりを約束する誓約共同体の記録である。

Ⅱ. 死海沿岸の洞穴内での『死海文書』発見

ヨルダン断層谷の最深部、地球上で最も低い海面下397⁶⁾のところ、死海（塩湖）がある。その塩分は海水の約五倍あり、あたりは荒涼とした砂礫の地である。1947年に死海の北西岸のクムラン洞穴群のひとつから、イスラムの二人の少年によって或る卷子本^{かんすほん}がみつけれられ、ほかにおびただしい貨幣や陶器類も発掘された。その土地には、ユダヤ教の分派クムラン教団がいて、かれらが死海文書をもっていた⁷⁾。つづいて1970年代にかけて発見された約200本の卷子本は『死海文書』と名付けられた⁸⁾。ヨルダン政府古物管理局のハーディングとエルサレム考古学研究所々長ドゥ・ヴォーが、同位元素・炭素14テストで、卷子本はイエス生誕前後の紀元前から後へ移る時代にあたることが知られた⁸⁾。『死海文書』が翻訳されて、イエスの生涯をとり巻くできごとについては、聖書の記載よりも正しい事実が書かれていることがわかった。

紀元前64年以來、イスラエルもユダヤもローマ帝国の支配をうけていた。新約聖書で一介の大功の息子とされているイエスが、どうして短期間にローマ帝国の反逆罪に問われるようなインパクトをユダヤ教徒に与えることができたかが問題である。実は、イエスはユダヤでもっとも偉大であったダビデ王の子孫であり、ユダヤ王国の救世主・メシアであるべき家系の出身者であるという⁹⁾。新約聖書にあるイエスの誕生と復活の奇跡の物語は、キリスト教徒にとって永い間のつまづきになって、多数の宗学・教派を生んだが、パウロの手記には奇跡物語がない。また、福音書を書いたルカは医師で、物事を正確に記す人であった。マタイ伝¹⁰⁾に、祭司長・学者・長老らと共にイエスを嘲弄していう。“彼はイスラエルの王なり。いま十字架より下りよ、さらば我ら彼を信ぜん”と。イエスは神に頼みたり、……三時頃、イエス大声に“エリ、エリ、レマ、サバクタニ”と叫び給う。“わが神、わが神、なんぞ我を見すて給いしとの意なり”とあるのは、素直に絶望の言葉と解すべきだという意見がある。人間の罪を背負って十字架につきながら絶望の淵で、“神よ 神よ”と、神への信頼を叫んだという見解である⁹⁾。この磔刑に殉じたイエスと、そのとき弟子達がローマの官憲に、“私どもはイエスと関係がない”と、ごまかして逃れた罪の意識がキリスト教徒の殉教精神、たとえばわが国のキリシタンが「踏み絵」を拒んで教えに殉ずる精神になり、いつの頃からか、殉教者は長崎にある「聖群像」のように聖人に列せられることになった。『死海文書』を解説したスーリング⁹⁾は、新約聖書の著者達は意図的にローマの官憲に対してイエス・キリストを隠蔽するために、表でナイーブな奇跡物語を語りながら裏で巧みに歴史的叙述をしているという仮説を提供した。なお当時、救世主・メシアを名乗る人が何人もいてイエスは信用されなかったという。また、遠藤周作¹¹⁾によればガリラヤ地方にはイエスという名前の人はたくさんいたらしい。さらに、イエスは、キリスト教という新しい宗教を立てようとしたのでもないという。ちなみに、シスチナ礼拝堂にあるミケランジェロの壁画「最後の審判」に描かれた神はユダヤ教のヤハウェである。

Ⅲ. オリент世界の7世紀頃におけるキリスト教とイスラム教の関係

砂漠のアラブ民族であるベドウィンは、部族の対立闘争を繰り返して“目には目を、歯には

齒を”という騎士道を誇った。その時代を「無道時代」といい、ベドウインは宗教をもたず、願いごとや訴えをするときには偶像の神々に頼っていた¹²⁾。7世紀初頭に、アラビア半島のメッカ市にマホメットがでた。平凡な市民であった彼が四十才の頃に突然、“自分はアラブ民族に遣わされた予言者である”という召命体験をした。神の啓示としてのコーラン（実は神のお告げとして彼が書き続けて、短い生涯に膨大な量になった¹³⁾）とともに、この世に生まれたと彼は信じた。もちろんメッカ市民は彼を信用しなかったので、同族が住むメッカを脱出してメジナに移り、“世界の終末とアッラーの審判は近づいた。いま悔い改めねば神の怒りの一撃を受けて民族は滅びるだろう”と、繰り返して警告した。

大地が大揺れに揺れ、山々が動きだす日、かの地獄の劫火を怖れるがよい。人間と偶像を燃料とする劫火を。
——コーラン——

当初マホメットは、創世紀のアブラハムが信じたユダヤ教の神ヤハウェ Jahave はもちろん新約聖書の神エホバ Jehovah も同じ神であり、さらにアラビア民族の神アッラー Allah（アラビア語で神の意味）もまた同一の神だと信じて、自分はユダヤ教、キリスト教と同じ真理を説くものと考えていた。つまり、イスラム教は旧約聖書にいうアブラハムが信じた神の復活であって、ユダヤ教徒、キリスト教徒とは同志であると思っていた¹⁴⁾。彼は、別にイスラム教をつくる気はなかったという。ところが、間もなくマホメットは、ユダヤ教徒ともキリスト教徒とも妥協ができなくなって、キリスト教徒がいう“神の子イエス”を批判して、天地の創造主であり唯一無二の絶対神に子が生まれることの矛盾を激しく糾弾するようになった。そして自分の宗教の信徒に、アッラーのおわすエルサレムの神殿の方向に向いて毎日一定の時間に脆いて礼拝・キブラ qiblah することを決めた。これはイスラム教の独立宣言であり、その時をイスラム暦の紀元元年とした。西暦622年のことである¹²⁾。それ以後、マホメットは祭政一致の大国家を建設しようとする政治家に変貌して、“すべての宗教がただ一つのアッラーの宗教になるまで戦え”と命じて「聖戦」を開始した。それから僅か十年で、632年に彼は没した。この短期間にメッカを陥落させて聖堂にあった夥しい偶像を碎き（前述したように、偶像とは自分たちの望みを聞き入れるように、人間が都合よく作り上げた神をいう）、シリア砂漠、アラビア砂漠からメソポタミア、地中海沿岸までをイスラム化した。その大きい戦力は、彼のカリスマ性に加えて信者皆兵の原則で各部族の人々すべてを戦士にした「聖戦」意識による¹²⁾。また戦利品の五分の一をマホメット自身を取り、残りの四分の一を部族の族長にあたえ、余りを戦費にあてたうえに、支配地で租税を課した経済力による¹⁴⁾。マホメット没後「神の使徒の代理・カリフ」が長老から選ばれて¹⁵⁾、アラブの大征服といわれる「聖戦」を続け、642年以降の7世紀中に東ローマ帝国の首都アレクサンドリアを占領し、続いてペルシヤ、シリアとエジプト、地中海南岸、カスピ海からアラル海沿岸にいたるまでをイスラムの支配下においた。カリフは王朝をつくって異民族を支配したのでイスラム帝国（ローマ人はサラセン帝国と呼んだ。サラセンとはシリア砂漠の遊牧民を指す）といわれた。このように単一王朝の版図として最大のイスラム化が実現した理由は、前述した宗教的使命感の高揚があったこと、シリア人、エジプト人がたった一度

の敗北の後、強い抵抗を示さなかったことによるという。8世紀になってアラブ人はイベリア半島に侵入してグラナダ、コルドヴァについてスペイン全土を支配下に入れた¹⁶⁾。現在のスペインにはアルハンブラ城をはじめイスラム文化のなごりが色濃く残っている。そのほか、イスラム世界の拡大にあずかった力に、さらにおよそ二つある。その一つは、イスラム商人や航海者の宣教があった。その二は、イスラム教が宗教的寛容性をもつようになったことである。そしてトルコからシルクロード、サハラ砂漠を経て西アジアの遊牧民族やインド西海岸、東南アジア、中国の一部、あるいはアフリカ東海岸のイスラム化が8世紀に実現した¹⁵⁾。その後、カリフの権力低下や分裂・反乱がおこり、929年に北イラクにシーア派の君主、エジプトにイスマール派の王朝などが生まれたのは、キリスト教の派閥をはじめ、あらゆる宗教が辿った歴史と同様である。おもしろいことに、キリスト教的神秘主義のグノーシス派との接触がイスラム教の神秘主義を生んだことであって、信徒は、“神に無私的愛を捧げることによって神との合一が得られる”という宗教的体験を求めた¹⁴⁾。イスラム帝国最後のアイユーブ朝の首都はバグダッドにあったが、1258年にクビライ・ハーンの率いるモンゴル軍に蹂躪されて滅んだ。

IV. キリスト教信者の回心とその持続

イエス、マホメットなど宗教的始祖が受けた「啓示」と、本節でいう「回心」とは違う。イエスは「救世主・神の使徒」であるという啓示を受けた使命感をもって、“天国は近づけり、悔い改めよ”と、巧みな譬え話をもちいて説いた。平凡な四十才の男マホメットは、ある日突然の啓示で、“神の審判は近づけり”と感得して、偶像崇拜や愚行を戒めた¹²⁾。これらの伝説を読むかぎり、啓示は使命感に促された積極的・超人間的な状態であるのに対して、回心は受け身で、前章で述べた「靈性」の気付きに似た心理状態である。啓示と回心に共通しているのは、不思議な超越的なものを感じることであって、W. ジェイムズ¹⁷⁾は、キリスト教徒における回心には心底から安らぎを覚えるような意識の変化を引き起こす過程であると記した。ところで、私たちの合理的意識とは意識の一つの特殊型にすぎない。意識には種々な層があって、無意識または潜在意識のほかにさまざまな状態がある。7世紀頃のインド哲学で、アサンガ・無着はアーラヤ識を底辺とした意識の層をあげて「唯識論」を展開した¹⁸⁾。アーラヤ識とは、過去から現在にいたるまでのあらゆる経験が跡を残した蓄えである「意識の蔵」をいう。ちなみにヒマラヤとは、ヒマ・雪のアーラヤ・蔵という意味である。唯識哲学からヨーガ・瑜伽が生まれた。近年、生物・無生物を問わず広く「宇宙意識」を持つ¹⁹⁾という人がいる。自律訓練法などを用いる精神的治療医のいう「トランス状態」も回心に似た意識である。キリスト教徒の宗教的意識は“神のみこころ”に叶うことを願い、平安の気持ちで他者との関係において愛情を抱こうとして、“みこころの俵になしたまえ”と、自己放棄に到るのが特長である。この世の事象がどんなに不運不幸にみえようと、救われている平安があると感じることを“信仰の厚い人”という。最も“信仰厚き人”にとって、彼らが交わる神が万物の絶対的な支配者でなければならず、万物は神が創造したと考えて進化論を否定する。ジェイムズはそれを過剰信仰という¹⁷⁾。ソ連の宇

宙飛行士ガガーリンが始めて宇宙を飛んだとき“地球は青かった”といったのは有名であるが、アメリカの大衆に衝撃をあたえたのは、むしろ“天には神はいなかった”と言ったことであった。これが無神論的共産主義のアメリカ・キリスト教文化に対する挑発として、宇宙開発計画の推進力になり、アポロ打ち上げの原動力になったという²⁰⁾。アポロ15号で、絶対無人・無生物の静まりかえった月面に降りたキリスト教徒の飛行士J. アーウインは、堅い信仰を持ってはいなかったのに、“神が背後におわすような感じ”に打たれて、或る岩石の上に鎮座するように乗かっていた際立って輝く小さな石を、“神が地球にもち帰るようにと置いてくださった”と感じた。その石は、分析によって四十六億年前の岩石であることがわかって、ジェネシス・ロック・創世記の岩と名付けられた。アーウインは今、或る宗教財団をつくってキリスト教の伝道に従事しているという²⁰⁾。現代における回心の例の一つである。ジェイムズは回心の実例を多数あげ、たとえば、古くは386年のアウグスチヌスの回心を記した。アウグスチヌスは「放蕩者であったが神の恩寵で聖者になった人」として、キリスト教徒の間で知られているが、実際はカルタゴへ遊学中に出会った身分の合わない女性と16年間も同棲して護りとおし、子供もできた。やがてミラノで大学教授になっが、ミラノへ出てきた母親モニカとの不和でその女性が故郷のカルタゴに帰り、アウグスチヌスは「肉の誘惑」に負けて第二、第三の女性と交渉をもって自分で苦しんだ。そのあげく、聖書のロマ書を読んでいて回心したという²¹⁾。前章の「靈性」に目覚めた人の例は、キリスト教の回心ではないが回心のひとつである。日本には、仏教にも通じたキリスト教の回心者、吉川一水²²⁾がいた。

ジェイムズは回心がおこる動機を、“窮地に陥るときこそ神の働き給う機会”という自己放棄の心理学で説明し、回心は瞬間的に起こることが特長であると述べた。そして、回心は人間の最も奇妙な特性であるといい、このような人間的経験は自然科学の境界を超えたものと結論して、“結局は生命に対する愛こそ宗教の推進力である”と記した。また、フォイエルバッハが²³⁾ “人間は宗教の始めであり、中点であり、終わりでもある”といったことは意味が深い。しかし、多くの現代人は、神があるとは信じていない。“神があるとは、恐怖と自然についての無知から生まれた観念である”という無神論に傾いている。無神論は虚無思想であって、頼りにできる何者もない虚しさがある。

イスラムの宗学については、古代インドのヴェーダ哲学、ひいては仏教の影響があったと推定されるので²⁴⁾、次回に「仏教との相関」で述べることにする。

神は突如、明瞭に事を示し給う。決して道理や推理でわかるものではない。いのちの内であって、いのちしていることを知る。この生命を宗教や教義や、神学や哲学で殺すことは罪悪である。

—吉川一水—

文 献

- 1) 川村喜一：古代オリエントにおける灌漑文明の成立。岩波講座・世界歴史，3，3。岩波書店，

- 1969.
- 2) 中山伸一：エジプト新王国の社会と経済。岩波講座・世界歴史，3，227。岩波書店，1969。
 - 3) 創世記（旧約聖書）：岩波文庫。
 - 4) 関根正雄：イスラエルにおける政治と宗教。岩波講座・世界歴史，3，357。岩波書店，1969。
 - 5) 松永希久夫：歴史の中のイエ像。NHK ブックス，1991。
 - 6) 小田垣雅也：キリスト教の歴史。講談社学術文庫，講談社，1995。
 - 7) 荒井 献：原始キリスト教の成立。岩波講座・世界歴史，3，353。岩波書店，1969。
 - 8) ジェームス・C・ヴァンダーガム著・秦 剛平訳：死海文書のすべて。青土社，1996。
 - 9) バーバラ・スーリング著・高尾まり訳：イエスのミステリー：死海文書の謎を解く，NHK 出版，1996。
 - 10) 聖書協会聯盟：新約聖書（200M）。1946。
 - 11) 遠藤周作：私にとって神とは（25刷）。光文社，1993。
 - 12) 井筒俊彦：マホメット。講談社学術文庫，1993。
 - 13) 井筒俊彦訳：コーラン。上，中，下，岩波文庫，1954。
 - 14) 嶋田襄平：イスラム国家の成立。岩波講座・世界歴史8，33，岩波書店，1969。
 - 15) 護 雅夫：西アジア世界，総説。岩波講座・世界歴史7，3，岩波書店，1969。
 - 16) 平城照介：イスラムの地中海世界進出。岩波講座・世界歴史7，97，1969。
 - 17) W・ジェイムズ著，柘田啓三郎訳：宗教的経験の諸相。上，下。岩波文庫，1996。
 - 18) 服部正明・上山春平：仏教の思想4・認識と超越。角川書店，1970。
 - 19) 河合隼雄・吉福伸逸編：宇宙意識への接近。春秋社，1986。
 - 20) 立花 隆：宇宙からの帰還。中央公論社，1985。
 - 21) 山田 晶：アウグスチヌス講話。新地書房，1987。
 - 22) 吉川一水：日々の糧。野口書店，1951。
 - 23) フォイエルバッハ，船山信一訳：キリスト教の本質，上・下，岩波文庫，1996。
 - 24) 井筒俊彦：イスラム哲学の原像。岩波新書，1980。